

第50回 SGRA フォーラム in 北九州

青空、水、くらし 環境と女性と未来に向けて

フォーラムの趣旨

北九州市は1950年代、60年代の経済成長に伴ってもたらされた大気汚染や水質汚濁など深刻な公害を克服し、今日では「環境未来都市」とも呼ばれています。その礎を築いたのは、子どもの健康を心配した母親たちでした。「青空が欲しい」というスローガンを掲げ、自発的に大気汚染の状況を調査し、その結果をもとに企業や行政に改善を求める積極的な運動を起こし、それが公害克服と環境再生の原点となったと同時に女性（母親）の社会参加の象徴ともなったのです。この運動の特質の一つとして、「反対運動」や「告発」ではなく、母親たち自らの活動により、女性たち自身の「意識化」と企業や行政の「意識化」を促し、公害克服や環境改善の方向付けを与えたことがあげられます。

今回のフォーラムは（青空、水、くらし 環境と女性と未来に向けて）と題して、北九州市のみならず、中国、韓国などの事例をもとに、深刻化する環境問題に直面する女性や母親の意識の変化や社会参加の試みを考察するものです。

今回の第50回 SGRA フォーラム in 北九州は、2016年9月29日～10月3日に開催される、第3回アジア未来会議のキックオフイベントとして開催しました。

SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化に立ちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ(www.aisf.or.jp/sgra/)をご覧ください。

SGRAかわらばん

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

青空、水、くらし 環境と女性と未来に向けて

日時 | 2015年11月14日(土) 午後1時~午後5時
会場 | 北九州市立大学北方キャンパス C202教室
主催 | 渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)
共催 | 北九州市立大学

総合司会: 高 偉俊

(北九州市立大学国際環境工学部教授/SGRAメンバー)

開会の辞

今西淳子(渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)代表)

近藤倫明(北九州市立大学学長)

事例発表

事例発表1.(日本)

「青空がほしい」運動に学ぶ 現在に問いかけるもの 4

神崎智子(アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員)

事例発表2.(中国)

変わるのか、人々の意識 中国の母親の環境意識の変化と活動 12

斎藤淳子(フリージャーナリスト/北京在住)

事例発表3.(韓国)

絶え間ない歩み 韓国YWCAの環境活動と女性の社会参加:
環境活動から脱核運動へ 22

李 允淑(イ・ユンスク)(韓国YWCA運動局部長)

オープンフォーラム

モデレーター: 田村慶子 32
(北九州市立大学法学部教授・大学院社会システム研究科長)

ミニ報告: 里山を考える会の活動について
小林直子(NPO法人里山を考える会)



「青空がほしい」運動に学ぶ 現在に問いかけるもの

神崎智子

アジア女性交流・研究フォーラム主席研究員

アジア女性交流・研究フォーラムの神崎と申します。アジア女性交流・研究フォーラムは、北九州市の外郭団体ですが、ご存じでしょうか。アジアフォーラムを知っている方、手を上げていただけますか。ありがとうございます。若い方はあまりご存じではないようです。

アジアフォーラムは、1990年に設立された北九州市の外郭団体で、今年25年目を迎えます。1988年、竹下首相のときに「ふるさと創生事業」という、全国の市町村に1億円ずつが交付されて行った事業がありましたが、アジア女性フォーラムは、北九州市の「ふるさと創生事業」で設立されました。若い人のために、覚えるコツが一つあります。皆さん、タレントのDAIGOさんを知っていますか。「ふるさと創生事業」を行った竹下首相はDAIGOさんのおじいちゃんです。ですから皆さん、テレビでDAIGOさんを見たら、アジア女性交流・研究フォーラムを思い出してください。

何をやっている団体かという、アジアの人たちとの交流と研究を通して、アジアの女性の地位向上という、男女共同参画を進めていこうというフォーラム、広場です。交流と研究の二つをやっていることには意味がありまして、研究は交流のためにやる。単に研究をやるのではなくて、交流を見据えた研究をやる。交流も、単に仲良くするだけではなくて、ちゃんとした研究に裏打ちをされた目的をもった交流をやるということです。こういった活動をしている団体ですので、ぜひよろしくをお願いします。

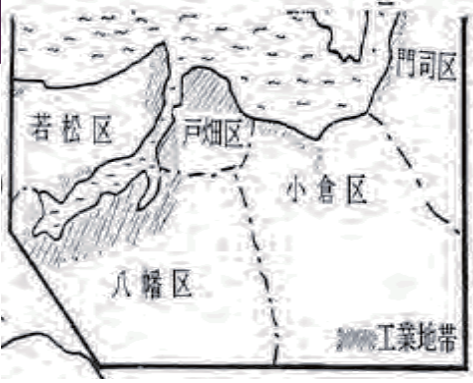
今日お話しするのは、北九州市の戸畑というところの婦人会が行った「青空がほしい」運動です。北九州市というのは、門司、小倉、戸畑、八幡、若松という五つの市が合併して1963年に誕生した都市です。これは、1965年当時の地図です(1)。北九州は日本の4大工業地帯の一つとして、明治から昭和にかけての日本の近代化と発展をけん引してきた地域です。

北九州市

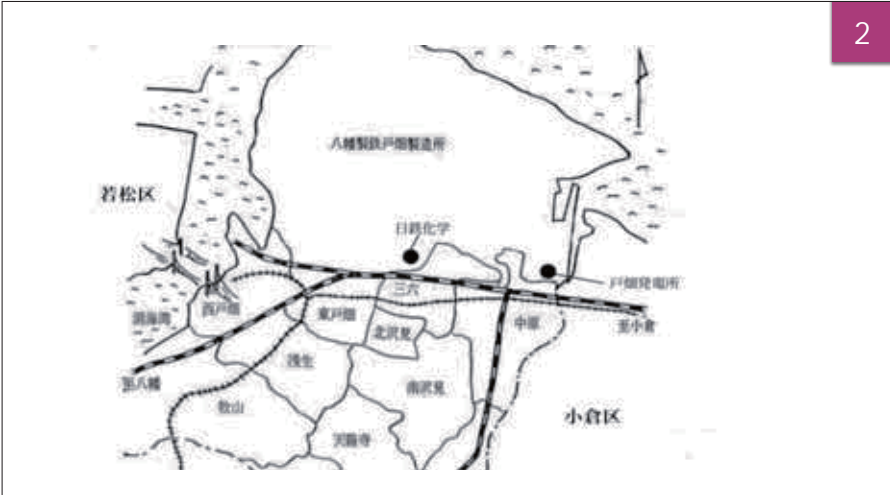
- ▶ 1963年に、門司市、小倉市、若松市、八幡市、戸畑市が合併して誕生
- ▶ 日本の四大工業地帯の一つ

地図出典：戸畑区婦人会協議会『1965第13回新生活展共同研究 青空がほしい』

1



2



戸畑区をもう少し拡大しますとこういう形で、戸畑区の3分の1ぐらいを八幡製鉄所が占めていました(2)。当時は「海に築く製鉄所」ということで、埋め立て地に最新鋭の製鉄所が建設され、化学工場が併設されていました。今からお話するのは戸畑の三六地区の婦人会と、中原地区の婦人会です。三六地区のすぐ北側に化学工場があり、中原地区の北側に発電所がありました。この二つの地区の位置をまず頭に入れていただいて、お話をしたいと思います。

まず中原婦人会の活動(3)です。1945年が終戦の年になりますが、終戦後、少しずつ婦人会ができていきますが、中原婦人会は、1948年に発足しました。先ほどお話したように、この地区の北側に日本発送電の戸畑発電所があったのですが、1950年ごろこの発電所の煙突からの降灰が激しくなりました。この降灰問題に対して、中原婦人会が立ち上がったのです。日本発送電というのは、九州電力の前身です。1950年ごろはちょうど戦後復興期で、北九州工業地帯に電力を供給するためにその戸畑発電所はどんどんここで発電をしていたのです。

発電のボイラーが8基あったのですが、そのうち二つのボイラーからの降灰が

中原婦人会の取り組み

- ▶ 中原婦人会:1948年発足
- ▶ 日本発送電戸畑発電所の降灰問題(1950年)
- ▶ 敷布とワイシャツを4ヶ所に3ヶ月干して汚染度を調査
- ▶ 1951年、市議会に働きかけ、議会と市が会社と交渉し、会社が集塵装置を設置(1951年着手、1952年完成)

特に激しかったのです。婦人会の集まりで降灰が問題になり、降灰はこの日本発送電から出ているとは分かっているのだけれども、これをきちんと調査しようということになりました。婦人会の人たちが何をやったかという、敷布とワイシャツを工場の近くから遠くまで4カ所に3カ月間干して、それを洗濯して落ちるとか落ちないというのを調査して、発電所の近くほど汚れているという証拠を調査しました。婦人会はこの結果を持って市議会に働きかけをし、市議会でも問題だと思っていた矢先だったので、議会と市が会社と交渉したのです。そして会社が集塵装置を設置したという経緯があるのです。この1950年の中原婦人会の降灰問題への取り組みが、戸畑婦人会が公害問題に取り組んだ最初のケースなのです。

戸畑市三六地区の公害問題

日鉄化学:カーボンブラック、ピッチコークスの製造

- 1957年 婦人会の婦人指導者講習会(市長出席)で、降灰問題を討論。
行政の立ち遅れを指摘。
⇒工場への働きかけ、衛生設備、緑化計画、公園整備を約束
中小企業の集塵装置設置への補助
- 1958年 戸畑市が煤塵測定開始
- 1959年 北九州5市が煤塵測定開始
- 1960年 三六地区の公害反対運動激化、1961年 市政懇談会
- 1961年 戸畑市が日鉄化学本社に陳情(三六婦人会長同行)
⇒除塵装置、ガス集管設置などの対応約束
- 1963年～64年 三六婦人会婦人学級
- 1964年 三六地区住民と日鉄化学が和解

三六地区の公害問題の経過のあらましの年表です(4)。

「青空がほしい」運動は、三六地区婦人会から始まったものなのですが、中原婦人会の取り組みを聞いて、三六地区でも、1950年代半ばごろから、だんだん公害問題に対する認識が高まっていくのです。北九州工業地帯には突然煙が出てき

たわけではなくて、悪いことは悪かったのですが、それをどの程度認識していくかということで、公害問題が出てきたことになるわけです。婦人会の記録によると、婦人会全体で取り組もうとといったのは、1957年に記録が残っています。まだ、戸畑市の時代です。1957年、婦人会の指導者講習会に市長さんと呼んで、煤煙問題をみんなで討論しました。そのときに、女性たちが行政の立ち遅れを指摘したのです。それで市長もこれはいけないと思って、工場に集塵装置をつけるよう働きかけをしたり、衛生設備、緑化計画をする、公園を整備するということ約束するのです。また、中小企業が集塵装置を設置するときに、補助しましょうということにもなりました。

そして翌年、戸畑市は煤塵の測定を開始しました。市内の7カ所で煤塵測定を開始したのです。そうすると、その次の年の1959年、北九州の5市全体で煤塵測定を開始することになりました。婦人会の人たちがいろいろと言ったことによって、市が動き出してきたという経緯がまず一つありました。

しかしながら、三六地区というのは非常に公害が激しかったのです。先ほど言いましたように、すぐ近くに化学工場があり、悪臭と黒煙に悩まされており、それに対する反対運動がありました。しかし、事態はなかなか動かなかったのですが、1961年に市政懇談会があった折に議論が噴出したのです。戸畑市では、問題となっている化学工場に陳情に行こうということになり、東京の日鉄化学の本社に、市長をはじめ、市民も一緒に陳情に行きました。このとき、三六婦人会の会長も同行しているのです。婦人会の会長は何を持っていったかということ、子どもが鼻をかんだちり紙を持って行って、こんなにひどいということを訴えたようです。

当時、日鉄化学も、これは悪いと思って、すぐに取締役会を開いて、集塵装置の設置やガス漏れの対応を約束するのです。実際に集塵装置を付けるのですが、当時の技術ですから、なかなかうまくいきませんでした。そういった中で、三六婦人会が婦人学級で公害について学び始めるのが「青空がほしい」運動の始まりです。「青空がほしい」運動の助走のところだと思っていただければいいと思います。

三六婦人会が63年、64年と続けて、婦人学級で共同研究をして、その後、戸畑の婦人会の人たちが、煤煙問題は1地区だけの問題ではない、戸畑区全体の問題だということで、65年から69年まで5カ年間、戸畑区婦人会協議会全体が取り組む。これが「青空がほしい」運動と言われているものです。

三六婦人会の取り組みです(5)。

三六婦人会の会員数は470人。三六婦人会が何をやったかということ、1963年、64年の婦人学級で煤塵の調査をしました。中原婦人会に倣って、白い布をぶら下げて汚れの調査をしたほか、どれだけの降塵量があるかということで、ワイシャツの箱を置いて降塵量を調べました。ここまでは中原婦人会と変わらないのですが、九州工業大学に行って煤塵の成分分析をしました。

アンケート調査も行いました。もう一つすごいのは、三六小学校の児童の欠席状況を調べたのです。先ほど煤塵の測定を戸畑から始めたと言いましたが、大気

三六婦人会（1951年発足、会員数(1963年)470人）

- ▶ 三六公民館の婦人学級で煤塵調査を行った(1963年、1964年)
 - ▶ 白布をぶら下げて汚れの調査
 - ▶ 降塵量調査(ワイシャツの箱)、成分分析(九州工業大学)
 - ▶ アンケート調査(1963年:470人、1964年:2500世帯)
 - ▶ 児童の欠席数と大気汚染の関係調査(三六小と農村)(1964年)
 - ▶ 戸畑の死亡者数と大気汚染の関係
- ⇒婦人会の「新生活展」で成果発表……「青空がほしい」

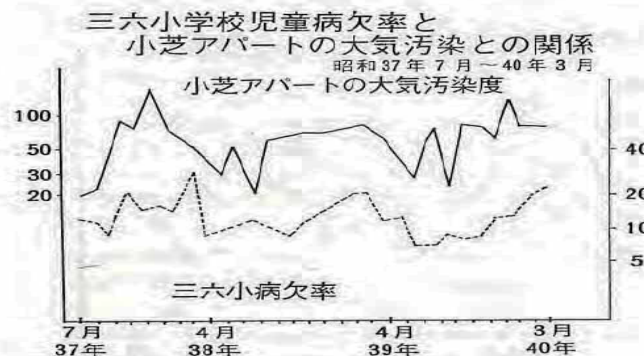
汚染の、降塵量や亜硫酸ガスの量の変化と、児童の欠席数の関係について、科学的な分析調査をしました。

また、住民の死亡率と大気汚染も関係があるのではないかとということで、この関係も調べたのです。戸畑の病院、保健所をまわって、どういう死亡原因が大気汚染と関係しているかというグラフを作っていたのです。

農村の小学校も調査し、いつ子どもたちが欠席するかを調べ、三六と比較しました。そして、婦人会の「新生活展」という発表の場で成果発表をしたのです。その成果発表の2年目の64年の発表のブースに掲げたキャッチフレーズが、「青空がほしい」というものです。これが非常に良かったということで、次の年からの婦人会のキャッチフレーズになっていきました。

そのときに児童の病欠率と大気汚染の関係を示すグラフも作っています。実際に三六婦人会がつくった資料は非常に見えにくいので、『青空がほしい』という、翌年に作った資料の中から抜いたものがこれです(67)。下が三六小学校の病欠率です。上の線が大気汚染度です。これが全部一致しています。こういう

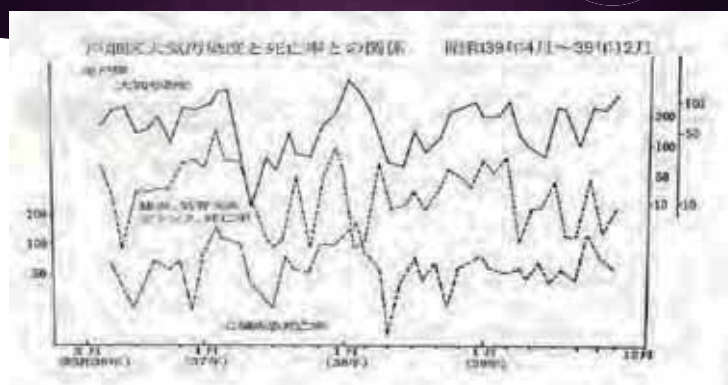
児童の病欠率と大気汚染 * 出典『青空がほしい』



大気汚染と死亡率

出典『青空がほしい』

7



ことをきちんとエビデンスとして出してきたわけです。ですから、これを基に、企業や行政に話ができたとのことです。大気汚染度が高くなると、子どもたちに症状が出るというふうになっています。

三六婦人会の研究成果の反響

8

- ・新聞報道、新聞座談会
- ・テレビ、ラジオの特集番組
- ・マスコミ等へ大きな反響、日鉄化学との和解へ貢献
- ・北九州市長期総合計画(マスタープラン)(1965年策定)
「公害の除去を要求する市民組織の育成強化に努める必要がある。すでに戸畑区三六婦人会が、自ら公害に対する調査を行ない、その調査の上にならば、公害発生企業にたいして、改善を約束させたような効果もある」(97頁)

三六婦人会の研究成果は、大きくマスコミに報道されたので、企業も何とかしないとイケないということになりました(8)。

公害問題は三六だけの問題ではなく、戸畑全体の問題だということで、1965年から、戸畑区婦人会協議会が全体で取り組みを始めます(9)。戸畑区婦人会協議会は三六を含めて、13の地区の婦人会から構成されています。三六婦人会は470人だったのですが、会員数7,000人の大きな団体の取り組みになったのです。

ここでは、先ほどの三六の調査を基本的に継承するのですが、三六地区だけではなくて、戸畑区全体の降塵量とか亜硫酸ガスの量の経年変化、区内全体の小学

戸畑区婦人会協議会の取り組み

(1965年～1969年)

- ▶ 13地区婦人会、会員総数7,000人
- ▶ 専門委員会の設置と、地区婦人会ごとのグループ担当
- ▶ 調査項目
 - ・区別の降塵量、亜硫酸ガス量の経年変化
 - ・区内小学校児童の病欠率と大気汚染の関係
 - ・区内死亡者調査、アンケート調査など
- ▶ 8ミリ映画「青空がほしい」の作成(1965年)

校の病欠率と大気汚染を全部調べていくのです。ですから、今まで13あるうちの一つの地区だけのものだったのが、13地区全体のデータが出てくるわけです。こういうことをやってきました。

他にもいろいろと、調査項目を5年間でどんどん増やして行って、それでだんだん調査が充実してくるのです。そのうちのハイライトが、最初の年に作ったのですが、「青空がほしい」という映画を作ったのです。戸畑婦人会では、公害の状況を残すために記録写真を撮っていたのですが、写真グループの人たちが、8ミリ映像の方がアピール度が強いのではないかということで、映画を作ることになるのです。

映画というのは、本当に素人の女性たちが、撮り方や編集の仕方などを全部習って、自宅にある8ミリ映写機を持ってきて撮って、それを編集したというものなのです。それを30分ものの映画にして上映して、「こんなにひどいのだ」ということを訴えた。これが非常にアピールしたのです。後で4～5分、お見せしたいと思います。

「青空がほしい」運動に学ぶこと

- ▶ 有能なファシリテーター……林えいだい
- ▶ 端的で明確なスローガン……目的の共有
- ▶ 金銭的補償ではなく公害の除去を求めた(技術の革新)
 - ・科学的な証明(エビデンスの提示)、映像の力
 - ・団体の力(マンパワー、グループ活動)、女性のエンパワーメント
 - ・マスコミの後押し
- ▶ 企業も市(特に戸畑市・戸畑市議会)も同じ方向を向いた

そして、この「青空がほしい」運動をきっかけに、行政や企業が公害克服に向けて動き出すことになったのです。

「青空がほしい」運動に学ぶことです(座)。まず2番目にあげた「青空がほしい」という非常に端的で明確なスローガン。それからこの「青空がほしい」運動をファシリテートしたのが、林えいだいという指導者。林さんは、今ノンフィクション作家なのですが、この方は市の教育委員会の社会教育主事で、婦人学級の指導をしていたのです。彼がいたというのは非常に大きなことだったと思います。女性の人たちは、家族の健康を守るために、この明確なスローガンの下に一致団結しました。

そして、何よりも、女性たちは、金銭的補償ではなく、公害の除去を求めたのです(物)。

婦人会の女性たちの思い

11

- ▶ 「家族の健康の管理者である一家の主婦として、(公害が)どのようにして人体に害を及ぼしているかを調べ、そのことがひいては全市に於ける問題であることを大いに声を大にして叫び、事業場、市当局、議会の良心をゆさぶり名実ともに健康な都市づくりの一端となれば幸である」戸畑区婦人会協議会『1965第13回新生活展共同研究 青空がほしい』
- ▶ 女性が自分たちの思いを声に出すことで、企業も市も同じ方向を向いた。

子どもたち、夫たちの健康だけを返してくれ、それから青空を返してくれと求めた。これだけが彼女たちの思いだったのです。そのために、科学的な証明、エビデンスを提示したり、団体の力を集結させたりという形でしたのですが、これは本当に自分たちの思いを通じさせたかったということで、その思いで、対立関係にならずに、企業も市も同じ方向を向いていったということを私は申し上げたいと思います。

時間なので、これで終わります。また後でお話をさせていただきます。ありがとうございました。

事例発表 2



変わるのか、人々の意識 中国の母親の意識の変化と活動

斎藤淳子

フリージャーナリスト / 北京在住

皆さん、こんにちは。今日はこういう所で、若い方もたくさんいらっしゃっている中で、中国のことについて考える機会を頂きまして、大変うれしく思っています。

「爆買」だけでない、変化する中国の人々の息づかい

私の自己紹介ですが、北京に在住して来年で20年になります。留学してから働いて、今では子ども2人を育ててフリーライターとして生活しています。私はライターとして、できれば大手のメディアが伝えない普段着の中国を伝えたいと思っています。皆さん中国と聞いてまず浮かぶものは、何ですか。おそらく、二つの漢字、「爆買」ではないでしょうか。テレビで今朝もやっていましたけれども、最近、中国といえば「爆買」ですね。「爆買」は本当に新しい、キャッチーな面白い話題ですが、爆買している人たちは、どういう人たちなのか。彼らは国の中でどういう生活をしているのかということを、皆さんは考えたことがあるでしょうか。中国自身は非常に急速に変化しているので、そういう変化やその中の人々の息づかいを伝えていければと思っています。

今日のテーマは「変わるのか、中国の人々の環境意識」ですが、皆さん、直観で答えてください。中国は変わっていると思う方。あまり変わっていないと思う方。中国の情報を見てくれ、毒ぎょうざとか、いつもそういう話があるじゃないか、あまり変わっていないと思う方。今日はそこを皆さんと一緒に考えていき、中国と聞いて頭に浮かぶのが「爆買」だけでなくともらえればと思っています。

母親と1.6億人が見た環境ドキュメンタリー

第1部の「アンダー・ザ・ドーム」に見る環境問題と母親の役割に入りたいと思います。これは中国で今年の春に出た大気汚染の告発ドキュメントで、柴静（チャイ・ジン）さんという女性が作ったビデオです（図1）。そこから見えてくる環境問題と母親の役割を考えていきたいと思っています（図2）。

このドキュメンタリーはYouTubeで日本語の字幕付きで見られます。100分のビデオでちょっと長いと思うかもしれませんが、一度見始めたらもうやめられない程非常によくできています。これはアメリカのTEDトーク、スーパープレゼンテーションと言われているものをかなり勉強して作ったものと思われる。世界的なレベルに達した非常に洗練された一つのドキュメンタリーになっているので、ぜひ皆さん今日お帰りになったら見てみてください。

会場でこのビデオをご覧になった方、又は聞いたことがある方はいらっしゃいますか。結構いらっしゃいますね。「アンダー・ザ・ドーム」と英語名が付いているのですが、今年の2月28日、中国の国会が開かれる直前に放映されました。放映されたのは、テレビや新聞ではなくて、ネットの動画サイトです。日本で言

図1

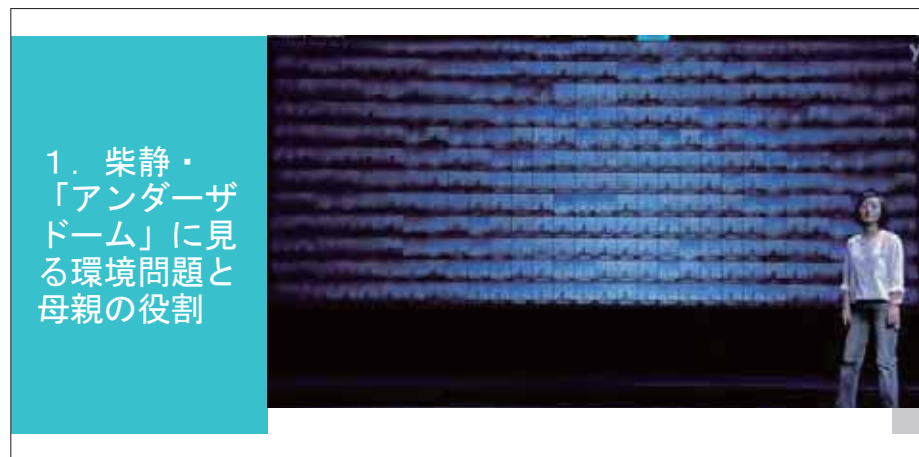


図2



うなら YouTube のような所に置かれました。すると、ものすごい勢いで広まりました。放映回数は1億6,600万回以上、2億回とも報道されています。とにかく圧倒的な人がそれをものすごい勢いで見たということです。放映直後は、私も携帯に毎日みんなから感想などいろいろなものが回ってきて、みんなが熱心に見ているのがよく分かりました。大多数の人は、すごく衝撃を受けて、彼女の勇気と善意を賞賛しました。もちろん、2億人近くの人が見ていますから、批判も出ました。けれども、大きな流れの中では、やはり「素晴らしい」「すごい」というのが大多数を占めました。


発表の翌日には、環境保護局の局長が謝意を表明しました。「素晴らしいことをやってくださってありがとうございます。非常に尊敬します」ということを言ったのですが、1週間後には放映が禁止となってしまいました。

これを作った柴静(チャイ・ジン)さんという女性は、39歳の母親です(図3)。もともとは、中国の中央テレビ(CCTV)の人気キャスターでした。CCTVは日本でいうNHKです。NHKは親方日の丸ですが、CCTVは親方五星旗の、非常に影響力のあるテレビ局。そこで頑張ってきた人です。彼女はCCTVを辞めてしまって、2年前に出産しました。今ではフリーのジャーナリストとなっています。このときの制作費は2,000万円かかったらしいのですが、それも自己負担でした。スポンサーをしたいという声が多く上がったらしいのですが、全部断って自分で制作しています。彼女は自分の自由度を守り、誰からもプレッシャーを受けたくなかったとのこと。権力やビジネスと距離を置いた新しい世代のオピニオンリーダーです。こういう人が、中国にも出てきているということです。

彼女は、大気汚染問題に取り組み始めたきっかけは、自分の娘が良性腫瘍を持って生まれてきたためだと語っています。その中で彼女が語っている言葉がこれです。「それまで大気汚染を怖いと思ったことも、マスクをしたこともなかった。ところが、一つの生命を自分の胸に抱き、彼女の呼吸、食べ物、飲み物全てに自分が責任を持たなくてはならなくなった時、初めて汚染が怖いと思った」。

会場のお若い方にとっては、子どものことは早いと思うのですが、これは多分皆さんのご両親もそういう思いで育ててくれたのだと思います。母親というの

図3



柴静
チャイ・ジン

39歳の母親

- ・元中央テレビ(CCTV)の人気キャスター、2年前に出産を期に退社し、フリーのジャーナリストに。制作費2000万円も自己負担で制作。
→権力と距離を置いた新しい世代のオピニオンリーダー
- ・大気汚染問題に取り組み始めたきっかけは自分の娘が良性腫瘍をもって生まれてきたためだった。

「それまで大気汚染を怖いと思ったことも、マスクをしたこともなかった。ところが、一つの生命を自分の胸に抱き、彼女の呼吸、食べ物、飲み物全てに自分が責任を持たなくてはならなくなった時、初めて汚染が怖いと思った」

は、自分の無力の子どもを抱くと、こういう気持ちになります。それは、中国人とか日本人とかを超越した母親の思いだと思います。こういう母親としての子どもに対する責任が、このドキュメントでも一貫して彼女が言っているところで、そこがまさに中国の多くの人々の心をとらえたのだと思います。

このビデオで扱っているのは三つのことです。PM2.5に代表されるスモッグとは何か、原因は何か、それに対してわれわれは何ができるのかという三本立てになっています。その中で、彼女は中国のエネルギー問題があるのだと指摘しています。消費しているエネルギーの規模が大きすぎる。質も非常に悪い。処理のレベルも悪い。排出コントロールができていないということを、詳しく実名を上げながら告発しています。

ご存じのように、中国の環境問題は近年非常に深刻な状況です。しかし、深刻だから駄目だと悲観的になって、誰かを批判して終わりというわけではないのです。このビデオの中で非常に重要なのは、将来どうしていけばいいのかという青写真を示しているところだと思います(図4)。彼女が使った事例というのは、ロサンゼルスとロンドンの例です。ロサンゼルスの場合は、厳しい排ガス規制の実施により、車がどんどん増えている中で、排気ガスの量を減らすことに成功したという事例です。

ロンドンも、昔50年代は、ひどく石炭に依存した社会だったにもかかわらず、それからどうやって抜け出していったかということを紹介しています。環境問題を語る際、「そうはいっても明日食べていかななくてはいけないから」という経済問題と環境問題の二者択一の議論に単純化されて片づけられてしまうことが多いです。しかし、重要なのは、彼女はここで決して問題は二者択一ではないと指摘している点です。それはWin-Winになり得るのだということ、ここで示しています。

これを見たときに私も非常に感じたのですが、北九州の経験も中国にとっては参照すべき点が多いということです。事例1で神崎さんが見せてくださいましたけれども、まさにそういった点です。女性の力の集結とか、学术界と市民

図 4



将来の青写真

環境VS経済を
乗り越えて

- ・ロサンゼルスとロンドンが大気汚染問題を克服した経験から、経済発展と環境保護は二者択一ではなく、ウィンウィンになり得るといふ青写真を提示
- ・北九州の経験も中国にとっては参照すべき点が多い
 - ・汚染克服に成功した事実そのものが持つ説得力と促進力
 - ・子供や家族の健康のために立ち上がった女性の力の集結
 - ・情報公開に向けての学术界と市民団体との協力
 - ・より広い市民の関心を得るためのメディアの協力
 - ・地方議会への市民参加を通しての穏健な改革の促進

→ 急進化を回避するためにも市民の声を反映する体制内の変革システムの構築が急務

→ 「秩序ある」「理性的な」市民運動の形成が課題
(馬軍IPE主任)

がどうやって協力したか。メディアの協力をどうやってうまく使ったかとか、そういう点は中国にとっても非常に価値があると思います。やはり汚染克服に成功した事例そのものが持つ力があると思います。私も今回、中国の環境関係の方には九州の資料をお配りしたのですが、すごく喜んでくれて、「僕たちは今こういうのが必要なのだ」と言ってくれました。まさにそうだと思います。

もう一つ気が付いたのは、中国から見ると日本の場合は地方議会への市民参加を通じて、穏健な改革が促進できた点です(当事者にしてみれば決して穏健ではなかった点もあると思いますが)。そういう既成のシステムを利用し、内部から変えていくことができたというのは、非常に良かった点だと思います。中国ではこの点が非常に難しいからです。

中国の市民運動をしている方は、中国で今必要なのは、秩序ある理性的な市民運動の形成だと言っていて、私もそれは非常にうなずきました。

このビデオに関する評価ですが、先ほど言ったように、大多数の良識ある人たちが賞賛しています。

崔永元さん、彼はもともと CCTV の人気キャスターですが今はテレビ局を辞めて、遺伝子組み換えに関するドキュメントを作ったりしている方です。彼も「非常に尊敬する」と言っています。一般の市民の陳さんは、「環境関連の番組では最高のものであった」と言っています。「人々の考え方を変えた」と指摘する人もいます。

中国の環境NGOで先駆的な仕事をしている馬軍先生は、チャイ・ジンさんのドキュメントについて、「影響は非常に大きい。おそらく彼女自身や政府の予想を大きく上回る反響だったのではないだろうか」と言っています。「環境情報の伝達としては歴史上最も成功したビデオだろう」と指摘しています。「彼女がこれだけの反響を呼んだ理由の一つは、彼女は母親としての強いメッセージがあったからだろう。もしこれが無かったら、おそらくここまでの反響は起きなかったのではないか」と話してくれました。

ということで、中国でも、母親としてジャーナリストとして、目の前に、目に見える形で中国の人をおびやかしている環境問題に取り組むといった意識が非常に高まっています。そして、そのことによって、国際的なレベルの、非常に質の高いドキュメンタリーが作られて、それを2億人近くの人が見ているというのが、今日の中国で起きているということです。

中国のママに聞きました、環境って意識していますか？

次に第2部の「中国のママに聞きました」に入りたいと思います。ここまで、有名な人がやった大きなお話ですので、もう少し身近なその辺でお買い物をしている人たちはどう思っているのだろうかという視点から、私の周りの30代後半、アラフォーのお母さんたちに聞いたお話をご紹介します。「環境について考えていますか」ということですが、皆さん節約には気を付けています。節水などいろいろなことはやっているという答えが来ました。ある人は、「環境に優し

いという理念は良いことだと思し、またこれは一つの流行でもあるから、私も取り入れている。例えば車に代わって、自転車を利用するようになり、マイバッグを持っていたりしている」と言っています。北京や広州など、大きな都市では最近レンタル自転車なども始めています。無料で借りられて、駅から駅で乗り捨てができる。それも環境保護の一環でそういう取り組みもやっていて、そういう機運は北京にもできてきているということです。

日本のごみの例を挙げている人もいました。中国はやはり環境保護をやるには国の法律とか条令がしっかりしていないと駄目だと指摘しています。その点、日本のごみの分別などは非常に素晴らしいと語っています。別に私が何か言ったわけではなくて、彼女はもうそういう情報を知っているわけです。中国の人は日本の事例とか、より環境に良いということに、すごく関心を持っていて、そういうことを知っている人も少なくないということです。


またある人は節水、節電し、紙は無駄に使わないようにしているとか、化学薬品の洗剤を少なくしているということでした。

次は母親たちの環境意識はどのように変わったかについてです。中国の時間の縦軸つまり以前との比較は、日本から見ていると非常に分かりにくいですね。それは多分、日本における、20年前の中国情報と、今日の情報があまり変わっておらず、いつも同じものが出てくるためかもしれません。実際の時間の変化を分かり易く捉えるために、三つの世代間の違いを聞いてみました(図5)。

中国の年配の方というのは、ものすごく儉約される方が多いです。一方で、アラフォーのお母さんたちから見るとどうかというと、60~70歳代の親の世代はまずお金を節約することが出発点になった節約で、環境保護という意識とは別物だと言っています。

節水などの資源の節約はしているし、貧しい時代をやり抜いた知恵もある。しかし、環境保護とはまた違うと、若いお母さんたちは自分の母親たちを見て言っています。日本の「もったいない」を英語にすると、「Reduce Reuse Recycle and Respect」ということができます。この中で、「Respect」というのがポイントで、中国の年配の方々はこれがない。もし、ただだったらどうなのというと、ただだったらもちろんたくさん使いますというところがあります。資源、ひ

図 5



祖父母は
「もったいない」世代

Reduce
Reuse
Recycle

質問2 祖父母、自分、子供の三世代で違いはありますか？

- ・祖父母の世代は環境に対してというより、自分の生活に直接関係のあることに関心を持っている。物が不足していた時代を経験しているので、節水をしたり、袋を持参して有料のレジ袋を使わないということは普段からしている。(北京出身、6歳の娘をもつ働くママ)
- ・60代の両親は常に節水を心がけて、物を無駄にしないように気を付けている。これは貧しい時代をやりぬいた智慧で、「環境保護」という意識は彼らにはそんなにないのではないかと。(北京出身、9歳の娘を持つ働くママ)
- ・祖父母の世代はまず、お金を節約することが出発点になっている。節水など資源の節約はしている。(5歳の息子をもつ働くママ⑥)

→ (自然環境に対する) Respect とは別のもの

いては環境を Respect するようになったのは今の若いお母さんたちが初めてという意味で、中国でも変化が見られるといえると思います。

では、子どもたちはどうなのか。このお母さんたちはみんな5~6歳とか10歳前後のお子さんを持っている人がほとんどです。どうですかと聞いたら、「この前私がバナナの皮をぼいごみ箱に入れたら、息子が怒って『お母さん、そこは生ごみじゃないよ。バナナの皮は生ごみだから、ちゃんと生ごみ用の所に入れて』と言われちゃってね」という話をしてくれました。子どものほうが、母親以上に几帳面に環境マナーを身に付けているということです。

もう一人の方は、まだ娘さんは5歳なのですが、「子どもたちは情報化時代に生きているので、私よりも多くの環境情報を理解していると思う」と言っています。このお母さんは謙虚な方で「私よりも娘の方がよく知っている」と言っていました。やはり中国でも国の政策として、環境教育はやっています。それは日本と同じで、「低炭素生活」というのを提唱していますが、世代間で大きな違いが出てきています。若い世代ほど環境問題に対する関心が高い。これは別の資料でも環境教育に熱心な先生の年代を見ると、若い世代の先生の方が興味を持っているし、研修も受けたいと思っているという結果が出ています。知っている情報が違うために、行動も違ってくるということがここから言えると思います。

先ほどのチャイ・ジンさんに関して「見ましたか」と若いママに聞いたところ、「もちろん見たわよ」というのが大体周りのお母さんたちの返事で、「非常に素晴らしいと思った」、「とても良かったと思う。彼女の努力に感謝している」という声が大多数でした。

しかし、中国メディアでは彼女を感情的だと批判する声もありました。「あれは女性独得の感情論だ」という男性の声も出てきました。しかし、お母さんたちからは、こうした批判を取り上げて、「どんな形であれ、人々にこのスモッグの問題に関心を持たせたという意味では、私は彼女に非常に感謝している」という声がありました。やはり強い共感を生んだということには間違いのないと思います。

ここでは三世代に見られる大きな違いということで、中国のジェネレーションごとに大きく環境に対する考え方も変わってきているということが、おわかりいただけたかと思います。


どうして中国のママたちの意識は変わったの？

では、次にどうしてこのように変わっているか、変化の背景を見ていきたいと思えます(図6)。今答えてくれたお母さんたちは、いわゆる中国の都市部にこの10年に登場してきた中産階級のママです。訪日している大多数の人々もこうした大都市の普通の人々です。新しいライフスタイルを模索する中で、日本からも学びたいというニーズが非常に増えています。例えば、中国の日本情報専門雑誌の『知日』がすごく売れていたり、この絵本を見たことのある方はいらっしゃいますか。日本では有名だと思うのですが、絵本の『はじめてのおつかい』が中国で非常に売れていたり、『窓際のトットちゃん』がベストセラーになったり


図 6

3. 背景分析

都市部中産階級の台頭



- ・北京で質問に答えてくれた母親たちは、いわゆる中国の都市部にこの10年に誕生した中産階級のママ
- ・訪日している大多数がこうした大都市部の普通の人々。新しいライフスタイルを模索する中で日本からも学びたいというニーズが急増
 - ・雑誌「知日」、ポプラ社の児童絵本、「窓ぎわのトットちゃん」の人気
- ・日本の普通のママに接近
 - 北九州の母親との共通性：
 - 高い教育レベル、
 - 権利や科学的知識の基礎、
 - 安定した経済基盤、
 - 子供への健康に対する責任感
 - (但し、在職者率は高い)



しています。トットちゃんは350万部以上も売れています。中国の教科書の推薦図書にもなっており、中国の教育省が、日本のこの本がいいよと薦めているという状況があるのです。簡単に言ってしまうと、中国のお母さんが接しているものも、どんどん日本の普通のママに接近しているということが言えると思います。

もう一つ、新しい都市部の住民の環境意識が高まった背景には、やはり客観的に目に見える環境の悪化があります(図7)。これは絶対に言える一つの事実です。目に見えないものだとなかなか誰も気づかないし、それに対してまじめに考えませんが、PM2.5というのはご覧のとおりくっきりと目に見えるものです。真っ白になってしまうわけです。ですから、悪化しつづける環境に対して、みんなが深刻さを認識して、行動する必要性も認識しています。やはり自分自身では何をしたらいいのか分からないけれども、だからこそ、さっきみたいなドキュメントが出てきたりすると、「よくやってくれた」「本当に感謝する」といった人がいっぱい出てくるということだと思います。

都市部の住民は、やはり自分の家族の健康を非常に懸念しています。海外のお


図 7

環境の悪化と意識の高まり

都市部のママは高感度

新しい都市部住民の環境意識の高まり
(IPE馬軍主任の分析をもとに筆者作成)

- ・悪化し続ける環境→目に見える環境汚染の深刻さを大多数の人が認識、行動する必要性も認識
- ・特に都市部住民は自分や家族の健康を懸念
- ・安全性への懸念から海外の紙おむつ、粉ミルク購買ブームも
(主に消費者としての防衛行為)
- ・中でも若い母親の子供への感度は最も高い
 - ・子どもの疾患などを期に環境に感心を持つ



むつや粉ミルクの購買ブームなども見られるほどです。私は実際向こうで子育てをしましたが、そこまでやらなくても大丈夫ではないかというぐらい、中国の若いママはすごく過敏になっています。中国のものは信頼できないから、日本のおむつを使うという人は少なくありません。日本のおむつがすごく売れているという状況からも、自分の子どもを守りたいという少し過敏すぎるぐらいの思いから、都市部のママたちが高感度でそういう安全情報に関心を持っているのが分かります。

また、それだけではなくて、中国自体が今、ものすごく速く変化しています。環境意識というの、いろいろなものの中の一つなのではないでしょうか。中国ではいろいろなグローバル化により情報自体が変わってきています(図8)。アニメでも「ドラえもん」の興業成績は、日本国内よりも中国の方が今年高かったのです。あとは「ちびまる子ちゃん」や「クレヨンしんちゃん」とか、日本人の私でさえ知らない新しい漫画を知っている中国の方も多いと思います。いろいろなものを中国の多くの人がりアルタイムで見えています。中国は、そういうものは規制しているのではないかと思われるかもしれませんが、ネット空間では何でも見られます。BBCからNHKスペシャルまでみんな見えています。

これも話題になったアメリカの連続ドラマですが、中国ではかなり広い範囲の人が見えています。こういう国際的なファッション雑誌が出ていたり、意外や意外、そういうところで非常に世界とリアルタイムでつながっているところがあるのです。

新しい教育理念もそうです。中国の教育をもっと新しいものにできないか、「トットちゃん」のような教育を自分の子どもにさせてあげられないものかと中国の多くの親は悩んでいます。海外留学や、日本での爆買など中国の人が一流の世界のサービスを消費するようになっていきます。いろいろなことが変わっていく中で、世界と本当に同じスピードで、中国の人たちは情報を消費してもの考えるような時代になってきています。このことと、環境意識の変化は深く関係していると思います。





これは先月北京であったアニメ展示会の様子なのですが、これも何万平方メートルの大きい会場で、日本のアニメのコスプレをするようなサブカルチャーの人々がたくさん参加していました。日本からは見えにくいのですが、いろいろな新しいことが中国では今起きています。

まとめ

最後にまとめです。環境意識の変化を考えると、やはり一番大きいのは環境が悪化したという事実がまずあります。それに対してどうにかしないといけないという意識が当然のことながら高まってきています。中国の都市部でのモータリゼーションで、車が一気に増えてしまったことが、PM2.5にも大きく影響していると思います。それに対して、みんなが意識を新たにしているということ。そして都市部の新しい人々が新しいライフスタイルを求めの中で、やはり環境にいい方がいいという考え方が出てきています。従来は中国の大多数が世界の工場の労働者だったのに、今ではもうそれだけではなくて、都市部では一流企業を経営する側になったり、自分が消費する側になってきた。その時に、自分はどういうことができるかという、新しい物事を考える視点が出てきているということです。

そしてもう一つ、新しいソーシャルメディアの役割は非常に大きいです。中国の人々の考え方を大きく変えています。情報を全く新しい形で伝達する技術革新が起きています。NGOもモニタリング結果を、リアルタイムで皆さんの手元の携帯電話に行くようなシステムを作っています。そういう中で、全く新しい方向で新しい情報が新しい形で流れはじめていることが、環境意識の上でも影響を与えているということが言えると思います。中国の人々の意識の変化と彼らの息遣いが少しでも伝われば幸いです。

ありがとうございました。

事例発表 3



絶え間ない歩み

韓国YWCAの環境活動と女性の社会参加: 環境活動から脱核運動へ

李 允淑 (イ・ユンスク)

(韓国YWCA運動局部長)

皆さん、こんにちは。こんなに意味がある場にお招きいただき光栄です。

韓国YWCAの100年近い歴史の中でやってきた運動をご説明します。2012年から現在まで一番力を入れている運動は、脱原発運動です。韓国では「脱核運動」と言います。原発の平和的利用というのが矛盾だということ、あくまでも核兵器を作るのと同じ工程を踏み、そこから得られるエネルギーとは切り離すことができない核発電所中心社会から抜け出すための脱核運動です。

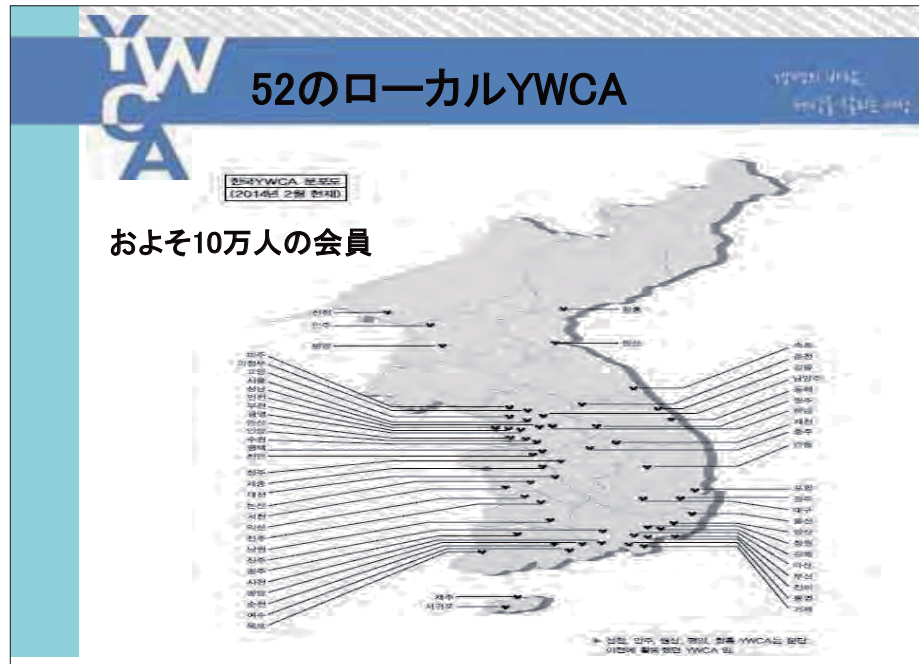
韓国YWCA: 農村、女性運動から環境運動への歴史

今年で韓国YWCAは93周年になります。植民地時代の農村活動、教育運動、封建的な時代での、女性の権利、人権運動、統一平和運動、青少年運動、そして80年代から今までやっている環境運動とか消費者運動と、さまざまな運動を今まで展開してきました。そして2012年から脱原発運動を中心に活動しています。

韓国YWCAは現在、52のローカルYWCAがあり、およそ10万人の会員を持っています。簡単に歴史をご紹介します。

植民地時代の1922年に創立し、貧しい農村で技術を教えたり、教育したりする運動からスタートしました。その後、女性による女性のための団体として、女性の権利を求める運動、例えば公娼制度廃止運動や、早婚制度反対運動、畜妾(ちくしょう)制度反対運動、家族制度の改定を求める運動などを展開し、70年代からは消費者運動、ごみ削減運動、リサイクル運動(アナバダ運動)などが運動の中心となります。

一方で、90年代からは飢餓に苦しんでいる北朝鮮の子どもたちに、粉ミルクを送る運動を、平和統一運動として、今も展開しています。



本格的に環境運動に取り組み始めたのは70年代からです。地域レベルで考えた環境運動や生活運動をしなければ根本的な解決はできないという意味で、草の根レベルの地域活性化運動と一体となった環境活性化運動でした。これを「タンポポ運動」(ミンドゥレ運動)と言います。

YWCAの環境運動を三つに分けて説明することができます。60年代から韓国も大気汚染の問題とか、川の汚染問題が深刻化し、多くの市民が皮膚病やぜんそくなどで被害を受けました。それに対して問題提起を始めたのが、環境運動の胎動期です。

盛んになったのが、80年代から96年までです。さらに汚染問題が深刻にな



1920年代から1940年代まで、公娼制度、早婚制度反対運動

1960年代まで続けた畜妾制反対運動



・1970年代から1990年代までの消費者運動、ゴミ排出削減運動、リサイクル運動（アナバダ運動）

り、リサイクル運動や節約運動などが始まりました。その時期に大きな問題になったのが、大電子企業がフェノール汚染水を無断で放出した事件でした。YWCAはそれに強く抗議し、その企業の製品の不買運動をやったりもしました。

そして、この時期から、もう少し根本的に環境問題を考えようとする動きが生まれ、環境運動よりも幅広いエコロジー運動が始まりました。

先ほど触れた、韓国のリサイクル運動は、「アナバダ運動」という別名を持っています。意味は、「アッキョッスゴ」というのは「大事に使って」、「ナノスゴ」は「分かち合って」使う。「バックォッスゴ」は「交換して使おう」、「ダシッスゴ」は「もう一度使おう」という意味です。それから頭文字を一字ずつ取って「アナバダ運動」と呼ばれるようになりました。このYWCAが始めた、ゴミ削



アナバダ運動

韓国の代表的なリサイクル運動♪



- アッキョッスゴ
-大事に使って
- なのスゴ
-分かちあって
- バックォッスゴ
-交換して
- ダシッスジャ
-もう一度使おう

減やリ サイクル運動は国の政策として取り上げられ、今までも今も幅広く展開されています。

環境運動から 脱核運動へ

第3期の時期からは、韓国のYWCAの運動は主に環境運動だというぐらい、量的にも増え、細分化されて多様化した時期です。

代表的な運動は「EM普及運動」です。「EM」というのは「E ffective



EM普及運動

汚染された土壌や川を生かす運動♪




- Effective Microorganism
- EM 醗酵液を作り、生活で使用して汚染された土壌や川を浄化
- 口蹄疫の被害の後、畜産汚染水浄化のためEMボールを投げる

「Microorganism」という意味で、川や土を浄化する効果がある微生物です。その「EM」の醗酵液の作り方や、使用方法などを教えたりする運動です。一時期、韓国ではブタの口蹄疫が広まり、生き埋めにされたブタの血で土や川が血で染まるほど、ひどい状況でした。そのときに、川にEMボールを投げる運動を展開したのです。それはかなり浄化の効果があったので、今でもEMボールを投げる運動は続けられています。

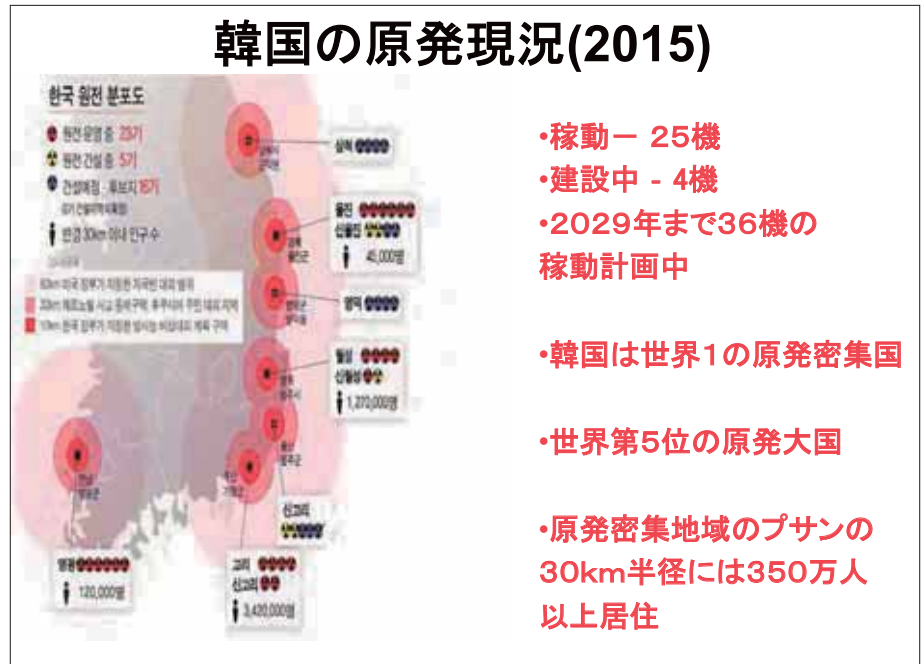
環境運動から本格的な脱原発運動に変わったのは、2011年の福島原発事故が大きなきっかけでした。韓国YWCAのメンバーは、福島原発が爆発する場面を見た瞬間に、「今までわれわれがやってきた運動を、全く違う意味で発展させなければいけない」という、すごい危機感と使命感を持ちはじめました。「これからは、全く違う世界が展開されるのだ」ということを直感し、新たな脱原発、脱核運動をしなければいけないという危機感と使命感を持ち始めたのです。

韓国の原発状況を見ると、狭い国にあまりにも多くの原発が稼働しています。現在25基が稼働しているのです。大統領は、2029年までに36基の原発を稼働させる計画を立てています。世界一の原発密集国なのです。

恐ろしいのは、釜山周辺は、たくさんの原発がある地域であり、半径30km内に350万人以上の人々が住んでいるという、ものすごく恐ろしい現実です。これは世界のどこにもない状況だと思います。東アジアは核の地雷畑だと言われるぐらいなのです。

中国は、今から100基以上増やす計画を立てているのです。私たちがいくら頑張ったとしても、これからどうなるのかすごく心配です。原発被害に国境はありません。これからの反原発運動も、国境を超えて、東アジアのレベルでやらなければならない、本当に切実な問題なのです。

こうした韓国の現実の下で、YWCAは脱核キャンペーンをやっています。2014年3月11日がちょうど火曜日だったので、そのときからスタートして毎週





火曜日に行い、今84回になっています。

「YWCAの脱核火の日campaign」というのですが、スローガンは「死の火を消して生命の火を生かそう」というものです。毎週、キャンペーンを行っているのは韓国の消費中心地、文化中心地であるソウルのミョンドンです。

1万人ほどが参加して、「老朽化した原発は止めよう」、「新しい原発の建設はやめよう」と、署名活動をやるのですが、このキャンペーンをやっているのが、一般の市民は、意外なほど原発事故がどれほど危険なのかを知らないということです。また自分が使う電気が、どのようなプロセスで生産され、私たちが使うことになるかも知らない。どれぐらいたくさんの人の犠牲の上で作られてい

るのかも、知らないという現実です。

産業側は、「新しい原発は経済的だ」と言うのですが、実際全く経済的ではありません。廃棄物処理の問題などを考えても、膨大なコストがかかるのに、安いエネルギーだと説明されているのが現実です。

こうした中で、原発の危険性や非経済性など、原発の真実について、市民に粘り強く、広く宣伝することが、キャンペーンの目的なのです。

しかしながら、危ない、危ないと言っても、現実にはただちに原発を止めることはできません。でも、少なくとも設計寿命が終わったにもかかわらず、延長して稼働している原発は閉鎖しましょう、というのが私たちの主張です。

また、ただ止めたり、閉鎖したり、反対したりすることではなくて、私たちが使うエネルギーを再生エネルギーへと転換し、また効率的に使い、更に、自分が使う電気を自分の地域で作ろう、というエネルギー自立運動などもやっています。

また、直接的な放射能被害の問題は、地域の人でないと敏感ではないのですが、放射能による食品の汚染問題には、女性たちは敏感になります。ですから、食べ物を放射能汚染から守るモニタリング運動なども、韓国YWCAの主な活動です。

ゴリ 1号機の稼働停止運動から得たもの

これまでの運動の中で一番成果を上げたのが、韓国で最初にできた原発ゴリ 1号機停止運動です。この原発ゴリ 1号機は、すでに設計寿命を延長して稼働しているのに、更に10年延長しようとする動きがありました。それは絶対やめましようという10万人の署名を集めるキャンペーンを行い、「老朽化したゴリ 1号機は





かならず閉鎖すると、公約して当選したにも関わらず、動こうとしなかった釜山の市長に手渡して、圧力をかけました。

その後、ゴリ 1号機の前で十字架行進をしながら祈りの会を開催しました。事故もたくさん起こっている、危険な地域の、350万人以上の命がかかっているのですから、切実な気持ちで十字架行進と祈りの会をしたのです。

その影響なのか、みんなが頑張った結果ですが、ゴリ 1号機の10年延長案は廃案になりました。脱核運動の歴史の中で、初めて勝利を勝ち取ったのです。この運動を通じて、今までとは違い、やればできるのだという自信と確信を得たの

Y WCA の脱核ブックレット



です。やれば止めることができるというポジティブな考え方になったのです。

また放射能汚染から安全な食べ物を守る運動には、日本からの魚の輸入をめぐる問題もあります。また、放射能モニタリングをやって、学校の給食に安全な食べ物を供給できるような条例を作ろうという運動が実を結び、プジョンという都市で、実際に条例が成立しています。

その他、女性や青少年向けのブックレット作りなど、いろいろな活動をしました。

一連の活動で一番大事なのは、やはりただ反対ではなくて、どうしたら脱原発社会が実現するのかという市民の正直な問いかけに答えて行くことなのです。

「脱核はできるのだ、既に日本とかドイツでそれが今実現されている」と説明しながら、だったら私たちも日常生活で、エネルギーを節約したり効率化したり、再生エネルギーを使ったら良いのだ、という運動を広げるだけでなく、実際に市民太陽光発電所協同組合を作って、資金を集めて太陽光施設を作るなどの具体的な試みを実践しています。

最後に：経験と信仰

韓国YWCAは、簡単に環境運動から脱核運動に変わったわけではないのです。女性運動や環境運動から、女の人たちが持っている力を引出し、キャンペーンのやり方や市民と話し合うやり方を学び、その経験の上で、脱核運動を徐々に広げていった歴史があるのです。そうした経験の積み重ねがあったからこそ、以前は原発がある住民たちの運動、危ないと思う人だけが参加した運動だったものが、福島原発事故以降は全市民レベルで広がったのです。この広がりには一番大きい影響を与え、寄与したのがYWCAだと評価されているのです。

それができたのは、やはり歴史的な経験と、キリスト教の信仰を持っている人として、神様の創造秩序と核は両立できない、正反対だという強い意識なのです。それが韓国YWCAが脱核運動を推進する原動力なのです。

また韓国YWCAの存在理由、目的を記した文書の中には、「正義、平和、神様の創造秩序の保存のために活動することが私たちの目的だ」と書いてあります。この精神は誰でも同意できることですので、宗派を超え、政治的な立場を超えて、一緒に脱核運動を推進する拠り所となるのです。

更に、先ほどの皆さんからの発表にもあったとおり、すごく危険なことが起こったときや、起こりそうだったときに、「大切な命を守らなければいけないのだ」という生命の危険に対する敏感性というか、命が発散する声を感じ取る感受性などは女性の大きな強みです。大切な命を守ろうとする本能的な意識、行動する意欲と希望、それが私たち韓国YWCAの強い財産、原動力だと思います。

韓国YWCAの運動のスローガンは、「命のかげ、世の中を動かす女たち」という言葉です。これからも、そのスローガンに合わせて頑張りたいと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

